二〇二五年度 小論文問題

11月2日実施

〈全学部全学科共通問題〉

次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

２０１０年前後を境にして、右肩上がりの経済パラダイム[*1]は反転し、成長の糊代（のりしろ）は失われた。しかし、そうであれば尚（なお）更（さら）、右肩上がりの時代に生まれた株式会社や、保険・年金などの社会システムや、利息をあてにした金融ビジネスのアクター[*2]たちは、経済成長こそが死活的に重要な課題であると言い続けなければならなかったのだ。しかし日本においては２００９年を境にして、長期的で大幅な人口減少のフェーズ[*3]に入っている。そうした状況の中で、いかにして経済成長を実現しようというのか。もともとは無理筋であるような経済成長を実現するためには、社会の無駄と思われるコストを徹底的に削減し、限られた資源をできる限り有効に使うための選択と集中戦略が必要なのだと誰かが言い出す。結果として、強者に資源を集中させ、福祉予算は切り下げられることになる。富める可能性のある競争優位にある強者に、まずは資源を集中し、そこに蓄積された富は、結果的には弱者に滴（したた）り落ちてくるというようなトリクルダウン神話が喧伝される。

そのようにして、この数十年間、いわゆる新自由主義的なイデオロギーが、西欧先進国を中心にして流布され続けてきたのである。

コロナは、そうした新自由主義的な価値観が作り上げてきた社会の弱点を直撃したのである。

ノーベル賞経済学者のジョセフ・スティグリッツがこんなことを言っている。

市場経済には復元力がなかったのだ。短期利益に集中し、長期安定性に注意を払ってこなかった。分かりやすくするためにこんなたとえ話をするが、多くの会社がわずかなお金を節約するために自動車からスペアタイヤを取り外した。ほとんどのときはスペアタイヤは必要ないが、タイヤがパンクしたときには必要だ。我々はスペアタイヤのない車、復元力のない経済をつくってしまっていたのだ。

（「朝日新聞ＧＬＯＢＥ＋」２０２０年８月２日）

コロナが映し出した社会の脆弱（ぜいじゃく）性とは、スティグリッツも言っているように、この社会がスペアタイヤなしで走行している自動車のようになってしまっているということである。つまり、経済効率を極限まで追い求めた結果、社会からあらゆる無駄を配[*4]し、スリム化した結果、もしもの時の備えまで削除してしまったということである。

では、なぜ私たちはそんなためのない、脆弱な社会を作ってしまったのか。そんなことをすれば、起こりうるリスクに対応できなくなるとわかっているのに、なぜリスクを冒（おか）してまで経済効率を追求してきたのか。この問いは、福島で起きた原発事故の際にも発せられたはずである。なぜ、起こりうる地震や津波のリスクが明らかだったのに、その対応を怠ったのか。いや、一旦事故が起きれば、対応することすらできなくなる原発に、なぜこれほどこだわり続けるのか。

人々に、こうした無理筋を許してきたものの正体を一言で言うなら、供給過剰の時代の合理主義思想だと私は言いたいと思う。

私は、合理的に考えることを否定したいわけではない。合理性は私たちに最も有効な判断基準の一つであることは間違いない。

ただ、私は合理性というものさしがあまりに使い勝手が良いために、他にもいくつもの判断の基準となるものさしがあることを忘れてしまっていることを指摘したいのだ。

さらに言えば、それがあまりに使い勝手の良いものさしであるために、「合理性」という概念が持つ本質的な意味とその限界を問おうとはしてこなかったのではないだろうか。

そもそも私たちが合理的であると言う場合、一つの枠組みを前提としている。たとえば合理的な治療と言う場合、医学的な枠組みにおいて理にかなっているかどうかを判断する科学的合理性を言う場合もあれば、今の予算と技術の水準において妥当な治療であるというように経済的、技術的枠組みを想定している場合もある。あるいはまた、個別的には最適だが全体としては必ずしも最適ではないというような領域的な合理性というものも想定できるだろう。一口に合理性と言っても、そのものさしはいくつも存在しうるのだ。

政治や経済の領域において、合理的選択理論というものがある。「人間は自己の利益・効用を最大化するように行動する」という、どうやら近代経済学の中心にあるらしい考え方である。こうした「経済合理性のものさし」に従うなら、人は安いものと高いものが市場に並んでいれば、必ず安いものを選好するはずであり、同じ賃金で苦しい労働と楽な労働があれば必ず楽な労働を選好するはずであると。

この考え方は確かに、とても便利で、使い勝手が良い。消費者の行動を見ていれば、この合理的選択行動は正しいように見えるかもしれない。私たちの文明が至り付いたのは、誰もが損得で物事を判断し、消費者として行動する経済の市場であった。おそらく「人間は自己利益を最大化するように行動する」という文言は「消費者は自己利益を最大化するように行動す

る」と書き換えられる必要があったのだ。だが、人間は時に消費者として行動し、時に生産者として行動し、時に何ものでもないものとして行動する生きものである。

人間は自己利益を追求するが、時として自己の利益よりも他者の利益を優先することがあるということだ。そんなことは、誰もが生きている中で、経験知として持っているはずである。にもかかわらず、消費者の特性である「自己利益の最大化」を、あたかも人間の特性であるかのように思い込んだ。いや、そのように思い込まされてきたと言うべきかもしれない。

新自由主義、自己責任論、グローバル資本主義は、社会全体の価値判断を、利益・効用の大小だけで測る経済合理主義を蔓延させてきた。本来経済合理性というものさしで測れないもの、測ってはならないものにまで、このものさしを採用してきたのである。

総供給が総需要を上回ってしまうような時代において、合理性とは経済合理性のことであり、巨大企業が生き残っていくための方便でしかないことに気づくべきだろう。それは、巨大企業の生き残り戦略ではあっても、社会全体が生き残る戦略にはなり得ない。なぜなら、私たちが生きている社会も、私たち自身も、経済合理性だけで説明できるようなものではないからである。私たちは、時に経済合理的に行動するが、時にはまったく割に合わない仕事を引き受けたり、他者に贈与したり、自分のパンを他者に与えたりするようなよくわからない存在なのだ。そして、それぞれの行動に私たちを駆り立てるものさしは、経済合理性のものさしであったり、家族や共同体が生き残るための全体的給付のものさしであったり、自己犠牲のものさしであったり、アダム・スミスが否定した慈悲心や博愛心というものさしであったりする。アダム・スミスが、各人の利己心の追求が社会を発展させる原動力であると言うのは、市場の発展を説明するためであり、その場合の各人とは、市場のプレイヤーである消費者、販売者、商売人のことである。私たちは、確かに消費者としての顔を持ってはいるが、他の顔も持っている。

巨大企業は日々、経済[*5]ダーウィニズムという闘争と淘汰[とう た]の戦いを続けているが、その価値観を社会のメンバーまでもが共有する必要などどこにもない。

そうであるにもかかわらず、人はしばしば巨大企業目線と価値観でことの良否を判断する。巨大企業が無くなれば、社会は富を生産できず、私たちが享受している利便性や、社会的効用を諦めなくてはならないかのように。

そうした思想の延長上に、本来は経済合理性など適応してはならないところまで、経済合理性のものさしをあてがって判断するという間違いを犯してきたのである。

その最も顕著な例が、前述[*6]した命の選別だろう。なぜ、若く元気な人間は、障害者や老人よりも価値があると考えるのか。その答えは、若く元気な人間の労働生産性が相対的に勝っているという、経済合理主義以外に見出すのは難しいだろう。

若い人々に言いたいのは、経済合理性というものさしを捨てて、慈悲心や博愛心というものさしや、公共心というものさしに変えろということではない。ただ、物事の判断をする時に、いつも一本のものさしだけで考えてはいないかを、疑ってみて欲しいのである。

冒頭の問いに戻ろう。「コロナ対策か、経済か」という問いが虚[むな]しいのは、この問い自体が経済合理性という一本のものさしで武装した経営管理者の問いだからである。私たちは、私たちが至上の価値であるかのように思わされてきた「経済」というものが、何であったのかをもう一度捉え直すべきかもしれない。経済を捉え直す時に必要なものさしは、経済合理性とは別のものさしになるだろう。

最後に、もう一度言っておこう。世の中には変えられるものと変えられないもの、変わるものと変わらないものがある。人が作り上げたものならば、それらは実体のあるものだろうが概念だろうが、変わり得るものなのだ。

（平川克美「コロナと価値のものさし」）

＊1　右肩上がりの経済パラダイム……パラダイムとは、ある時代のものの見方・考え方を支配する認識の枠組みのこと。この場合は、「経済は右肩上がりに成長し続けるものである」という経済の見方・考え方のこと。

＊2　アクター……活動などの当事者・参加者・動作主体のこと。この場合は、経済活動を行う主体のことを指す。

＊3　フェーズ……局面、段階。

＊4　配し……「排し」の誤りと思われる。

＊5　経済ダーウィニズム……ダーウィンの進化論の生存競争による適者生存という考え方と同様に、経済活動においても、弱肉強食の競争によって、強者だけが生き残るという考え方のこと。

＊6　前述した命の選別……コロナ禍において、人工呼吸器や人工心肺装置などの限られた医療資源をどのように分配するかという問題が浮上し、高齢者よりも若い人々の命を優先するという命の選別（トリアージ）が議論になったこと。

設問一　この文章の内容を要約しなさい。（三〇〇字以内）

設問二　この文章の内容を踏まえて、自分の考えを述べなさい。（五〇〇～六〇〇字）